

ブラジルへ帰った子ども達

——日本での滞在・就学経験が帰国後に及ぼす影響と課題——

熊崎 さとみ

天野 弥生

1. はじめに

ブラジル人児童生徒が在籍している小中学校では様々な問題を抱え、同様にブラジル人児童生徒本人やその保護者達も学校生活の中で多くの問題に直面している。それは「ことばの壁」による家庭と学校との連絡の取りにくさや学習の困難さ、異文化間の摩擦の他に、保護者の、子どもの教育に対する将来展望が様々な影響を及ぼすこと(熊崎 2003,熊崎・天野 2006)などがあげられるが、注目すべきはブラジル人児童生徒の場合、その多くがいずれは帰国するという特徴を持っていることである。日本で多くの問題を抱えながら教育を受け、その後帰国した子どもたちにおいて、ブラジルでの教育やしいては帰国後の生活や成長に影響が現れるであろう事は想像に難くない。そこで、日本で義務教育を受けて帰国した児童生徒のその後を追うべく、ブラジルに渡りインタビューをおこなうと同時に、そういった子どもたちの受け入れ状況はどうなっているか、受け入れ校へのインタビューも試みた。本稿はその報告である。

法務省の統計によれば、2004 年末の時点で日本でのブラジル人登録者数は 28 万 6 千人を越え、その数は全外国人登録者数の約 15%を占めている。1990 年の入国管理法改正以来、家族を伴って来日するブラジル人は増加しており、登録者数には就労者ばかりでなくその家族も含まれ、義務教育課程学齢期である子どもも多く含まれている。長野県の場合、2004 年末約 17,700 人のブラジル人登録者のうち、学齢期の子ども数は約 1,100 人であり、そのうち未就学者と母国語教室(いわゆる「ブラジル人学校」)への通級者を除く約 640 人が日本人と同じ小中学校に在籍している(2004 年 5 月 1 日長野県国際課調べ)。長野県内の全児童生徒数から見ればごくわずかな人数であるが、決して無視できる数ではない。ブラジルでのインタビューで見られた問題点を日本での教育にフィードバ

ックすることによって、日本でのよりよい教育や問題の克服への糸口とするべく本調査を行った。

2. 調査

2-1 調査のねらい

ブラジルに帰国した「日本で義務教育課程に就学経験のある子ども」とその親に、日本滞在中とブラジル帰国後の生活及び学校生活についてインタビューを行うことで、日本でブラジル人児童生徒に対する教育の有用だった点や問題点を明らかにする。同時に、帰国した「日本で就学経験のある児童生徒」を受け入れている小中学校へのインタビューを行い、実務的な受け入れ状況と日本で受けた教育による影響がどのように現れているかを明らかにすることを目的とする。

2-2 調査期間

2005年8月26日～9月6日

2-3 調査地

サンパウロ州サンパウロ市及びパラナ州ロンドリーナ市。ロンドリーナ市はサンパウロ市から500kmほど内陸に位置し、両市とも、日系人が多く在住する地域である。

2-4 調査対象

- ①日本で小中学校に通った経験がある子ども及びその親
- ②日本から帰国した児童生徒が在籍している学校

インフォーマントの選定は、時間的制約や様々な事情により非常に困難であったが、最終的に親子7組(3-1-1 A～G)、母のみ2人(H,I)、兄弟姉妹を含む子ども5組(J～N)、の計14組25人の協力を得られ、7校を訪問することが出来た。

2-5 調査方法

渡伯前に現地協力者に、条件に該当するインフォーマントの選定を依頼した。調査はインフォーマントの自宅や仕事先、学校、調査者が滞在するホテルなどでインタビュー形式で行った。インタビューは基本的に調査者が準備した質問項目に沿って行ったが、時間の制約やインタビュー環境、話の流れなどの様々な条件により、全員に対して全く同じ質問が出来たわけではない。また日本で

の滞在状況や帰国時の状況などが個々に異なるので、ケーススタディとして報告する。

3. 調査報告

3-1 個人インタビュー

インタビューの内容を以下に列挙するが、インフォーマントのプライバシー保護のため個人名は用いず全て記号で表す。

3-1-1 インフォーマント基本データ (表1)

ID	年齢	日系度	就学歴			日本語学習歴 渡日前
			渡日前	日本滞在中	帰国後 (編入時の手続)	
			家庭内使用言語			
			渡日前	日本滞在中	帰国後	
A-1 (兄)	21	3	小5 終了	小6～中3	高校編入 (テスト)	なし
			混在	混在	混在	
A-2 (妹)	17	3	小1 終了	小2～小6	7年 (書類)	なし
			混在	混在	混在	
B ※	8	3		保育園～小1 途中	小1 (正規入学)	/
			親が日本語混在	日本語	ポ語	
C	21	3 混 血	保育園	小1～小6	小6 (下) (テスト)	なし
			祖父と日本語	母とポ語 弟と日本語	混在	
D	20	3	保育園	小1～小6	7年 (テスト・書類)	なし
			ポ語	日本語	日本語の方が話し易い	
E	19	4	7年途中	中1～中3 途中	高1 (下) (書類)	あり
			ポ語	ポ語	ポ語	
F	16	3	5年終了	5年終り～中学終了	高1 (書類)	なし
			ポ語	ポ語	ポ語	

G-1 (姉)	22	非日	小3途中	小3～小6	小6(下) (書類)	なし
		系	ポ語	ポ語	ポ語	
G-2 (弟)	20	非日	幼稚園	小1～小4	小5 (書類)	なし
		系	ポ語	ポ語	ポ語	
H	15 ※	4	/	幼稚園～小3	小3(母の意向で下) (書類)	/
				日本語	ポ語	
I	7 ※	4	/	保育園～小1途中	小1(正規入学)	/
				ポ語	ポ語	
J	23	3	小1途中	小～大	(一時帰国中)	なし
			?	父母とポ語 弟と日本語	/	
K	18	混血	/	保育園～小3途中	小3(下)	なし
				祖父が日本語	ポ語	
L	9	3	/	ブラジル人学校	小3 (書類)	?
				祖父と日本語	?	
M-1 (姉)	13	?	小1	小1～小6	小6(下) (テスト)	?
			?	日本語	日本語	
M-2 (妹)	10	?	/	幼稚園～小3	小3(下) (テスト)	?
				?	日本語	
N-1 (姉)	8 ※	3	/	保育園～小3	小3	/
				混在	混在	
N-2 (弟)	6 ※	3	/	保育園～小1	小1	/
				混在	混在	

注1) 「?」はインタビュー対象が子供のため、「覚えていない、分からない」と答えたところ。

注2) 表中、「※」印は日本生まれを示す。

3-1-2 個人インタビュー結果

以下に個人インタビューで聞き取ったことを要約して示す。なお、空欄は、子供の低年齢・日本で出生したことや、親のみに対するインタビューであったためなどの理由で、無回答であることを示す。また母親のみインタビューに応じてくれた H.I は親から見た子供の様子を記す。(表 2)

ID	日本に行くことをどう思ったか	日本の生活・学校・友だちはどうだったか
A-1	楽しみ(雪・異文化)	給食は初め食べられなかったが、日本の学校のスタイルは好き。友だちがすぐ出来て、友だちが日本語を教えてくれたので早く覚えた。
A-2	友だちができるか心配	
B		日本人の友だちがたくさん出来た。
C		最初は授業が難しかった。
D	びっくりした。 うまくいくか心配だった。	学校にブラジル人はいなかった。
E	おもしろそう。 日本語は話せなかったが心配しなかった。 友だちと離れることが心配	慣れるまではいやな気持ちだったが、だんだん楽しくなった。
F	父が日本にいたので、日本に行きたかった。	給食が初め食べられなかった。ことばや環境に慣れるのが大変だった。
G-1	行っても帰ると思っていたので問題なし。	給食に慣れなかった。最初は楽しかったけれど、だんだんつまらなくなった。
G-2	大丈夫だと思った。心配なし。	特に問題なし。ことばが分かるようになってから友だちがたくさんできた。
H		いじめ以外では問題はなかった。
I		特に問題はなかったし、親もできるだけ行事に参加するようにしていた。日本人の友だちが出来てよく遊んでいた。
J	特にことばが不安 友だちと離れることが心配 友だちができるか心配	遠足や運動会が楽しみだった。 給食や掃除はびっくりしたが、誰にも聞けなかった。
K	ブラジルに残る祖父母のことが心配	日本の学校システムは良かった。そこで身につけたこと(掃除・礼儀など)は

		今も生かしている。日本人の友だちもすぐできた。
L	うれしかった。	
M-1		
M-2		
N-1		とてもよかった。
N-2		とてもよかった。

(表3)

ID	日本の学校で楽しかったこと、うれしかったことは何か	日本の学校で悲しかったこと、困ったこと、いやだったことは何か
A-1	早くたくさん友だちが出来たこと。	特になし。
A-2	運動会、音楽会。	特になし。
B	全部。	特になし。
C	遠足、登山。	アイデンティティが不安定だった。
D	給食、旅行の事前学習。	いじめにあったこと。
E	休み時間、給食、掃除、行事。	運動会。 ことばが分からなかったこと。
F	行事、体育祭、部活。	テストの点が悪かったこと。
G-1	動物の飼育、委員会、給食当番。	級友は子供っぽくてなじめなかったし、日本語が出来るようになって自己主張をしたら級友と距離が出来た。先生が子供を叩いたのがショックだった。 掃除。
G-2	給食当番、係りの仕事、体育、運動会。	特になし。
H	遠足。	外人だと言っていじめにあった。
I		
J	友だちが出来たこと。	日本語が分からないことと外国人だったこととで、いとこがいじめにあったこと。自分もことばがわからないとき、他の人がこちらを見て笑っているのがいやだった。
K	運動会。	国に残っている祖父母が心配だった。
L	友だちが出来たこと。	友だちとのけんか。

M-1		ことばがわからなかった。
M-2		
N-1	遠足。みんな楽しかった。	特になし。
N-2	算数。	特になし。

(表4)

ID	ブラジルへ帰ることをどう思ったか	ブラジルへ帰って良かったことは何か。	ブラジルへ帰って困ったこと、いやだったことは何か
A-1	もっと日本にいたかったが、仕方ない。	自分の方が学習が進んでいたこと。	
A-2	もっと日本にいたかった。	ブラジルにいる親類に会えたこと。	ポルトガル語。3年くらいたってやっと問題が無くなった。
B	友だちと離れるのが寂しかった。	ブラジルでも友だちが出来たこと。	特になし。 ポルトガル語もすぐ覚えた。
C	帰りたくなかった。	親類に会えたこと。	ポルトガル語。今も発音がおかしい。ことばが原因で、勉強も難しいことがある。今も計算や思考は日本語。
D	うれしかった。		精神的に不安定。
E	うれしかった。	親族や友だちに会えたこと。	教科学習。日本にいたときは日本語学習中心だったため。 治安が悪くて出歩けない。
F	いやだったが仕方がなかった。	友だち、家族に会えたこと。	治安が悪くて出歩けない。
G-1	うれしかった。	帰りたかったからうれしかった。	特になし。
G-2	特に何も思わなかった。	友だちと会えたこと。	ポルトガル語。教科学習。
H	いやがった。		ポルトガル語。
I	ブラジルを怖がった。 帰国後しばらく親と一緒に登下校。		ポルトガル語。 学校のシステムや教師との関係の持ち方にとまどった。
J	(ボ語習得の為に自分の意志で一時帰国)		ポルトガル語。 ブラジル式の挨拶。 治安が悪く、一人で出歩けない。

K	国にいる親族に会えるのはうれしかった。	親族といられること。	ポルトガル語。今でもポルトガル語と数学に問題がある。 ブラジルの学校のシステムが嫌い。
L	ブラジルが怖かった(治安面)。		特になし。
M-1	日本にいたかった。もうすぐ中学入学だったのでショックだった。		自分は何人かわからない。
M-2	日本にいたかった。友だちと別れたくなかった。		自分はブラジル人と日本人の半々だと思う。
N-1	いいかなあと思った。	特になし。	特になし。
N-2	いいかなあと思った。	特になし。	特になし。

(表5)

ID	学校のシステムについて	日本語をどうするか	再訪日
A-1	日本の学校の方がいい。	マンガ・テレビ・e-mailなどで保持。	留学したい。
A-2	日本の学校の方がいい。	マンガ・テレビなどで保持。	旅行したい。
B	どちらの学校も好き。友だちがいるから。	わからない。	友だちに会いに行きたい。
C	日本の学校の方がいい。ブラジルの学校のシステム(半日・掃除がない)に慣れない。	今も勉強継続中。	留学したい。
D	ブラジルは私立なら勉強がしっかり出来るところがいい。	今も勉強継続中。	住みたい。
E	日本は人間関係が冷たいが、学校の行事や、規律正しきなどがいい。ブラジルは勉強のレベルが低いが、人間関係の持ち方がいい。	勉強はしていないが、日常的に仕事で使用。	留学したい。
F	日本の学校システムが好き。ブラジルは勉強が遅れている。	これから日本語学校に行く予定。	留学したい。
G-1	日本は動植物との接触があるのがいい。勉強はブラジルの方が進んでいる。	前は勉強していたが、今はしていない。	旅行したい。
G-2	日本は家庭科などがあるのがよかったが、服	日本語学校通学中。	サッカーコ

	装指導が厳しすぎる。勉強は日本の方が簡単。		一斉として行きたい。
H			旅行したい。
I		日本語学校通学中。	
J			再訪日する。
K	日本の学校は良かった。ブラジルの学校システムにはまだ慣れないところがある。	また勉強したい。	日本のブラジル人学校で働きたい。
L			旅行したい。 留学したい。
M-1	生徒が元気なところはブラジルがいいが、日本の先生に対する態度がいいと思う。		日本で保育士になりたい。
M-2			
N-1		また勉強したい。	留学したい。
N-2	ブラジルの学校は掃除がないのがいい。		留学したい。

3-2 学校インタビュー

いずれも日本から帰国した児童生徒が在籍している学校である。ここでは主に、日本から帰国した児童生徒の受け入れ状況、その子ども達の様子などについて報告する。

パラナ州立 A 校

創立年	1945～46年
設置学年	小中学校8年・高校3年・秘書科1年
生徒数	3,473人
教員数	不明
授業形態	3部制
小学校の主な教科	ポルトガル語・算数・理科・社会・体育
編入手続き	日本語の書類とポルトガル語の書類を提出。編入時の学年については、専門の職員が書類により日本での既習項目と未習項目を考慮して、テストした上で判断。
受け入れの対応	ポルトガル語ができなくても特別なことはしない。 未習事項は、各自でカバーする。

帰国生の良い点	特になし。
帰国生の問題点	コミュニケーションに問題あり。
学校への影響	特になし。
教師としての意見 その他	教科書は、中学までは、英語を除く全教科、高校はポルトガル語と数学を除く全教科政府が用意するが終了時に返却。

パラナ州立 B 小学校

創立年	不明
設置学年	小学校 4 年
生徒数	410 人
教員数	12 人・美術 1 人・助手 6 人
授業形態	2 部制
主な教科	ポルトガル語・算数・理科・社会・体育・美術
編入手続き	編入学年は、日本からの書類により決定。
受け入れの対応	授業中、特別扱いはいはしないが、取り出し授業で週 2 回ポルトガル語を教えている。ポルトガル語と地理・歴史は、日本では学習していないので、テストして補強。
帰国生のよい点	まじめで、行儀がよく責任感も強い。補講にもきちんと通ってくる。
帰国生の問題点	はじめは、ポルトガル語が話せないのが、友達と遊べなかったが、現在はコミュニケーションが取れるようになった。しかし、ポルトガル語の発音に誤りがみられる。
学校への影響	まじめさや行儀のよさが、他の子どもたちにも良い影響を与えている。
教師としての意見	特になし。

ロンドリーナ市立 C 校

創立年	1970 年
設置学年	幼稚園・小学校 4 年
生徒数	450 人
教員数	35 人(内日本がわかる教師 1 人)
授業形態	2 部制
主な教科	ポルトガル語・算数・理科・社会・体育・美術
編入手続き	編入学年は、書類とテストにより決定。
受け入れの対応	空いている時間に、学習障害児のための専任教師が補習。 取り出しで、ポルトガル語を教える。
帰国生のよい点	まじめで、行儀がよく教師に対して敬意を払う。

	はじめはおとなしいが、すぐ慣れる。学習面も問題ない。 数学が優れている。
帰国生の問題点	年齢の大きな子どもでは、アイデンティティに迷いが起こる。
学校への影響	特になし。
教師としての意見	新しい経験をしてくるので良いことだと思う。

私立 D 学園(日系母体)

創立年	1959 年
設置学年	2 歳から 7, 8 歳 (小学校 1, 2 年) まで。
生徒数	日本語だけを習いに来る人は、成人 25 人を含む 123 人。その他、チェス 19 人、折り紙 14 人、サッカー 22 人 リコーダー 10 人、キーボード 14 人、漫画 10 人、習字 3 人など多様な講座がある。
教員数	日本語のわかる教員は 3 人。
授業形態	幼稚園は 2 部制。小学校は、午後だけ。
主な教科	ポルトガル語・算数・理科・社会・体育・美術、音楽
編入手続き	日本からの書類か、なければ、テスト、ニーズによる。
受け入れの対応	授業は、教師が通訳しながら進めることもある。
帰国生のよい点	日本での学校生活(掃除など)を肯定的にとらえている。
帰国生の問題点	家庭でも、日本語を使っている場合には、ポルトガル語を発音だけで書く(耳から聞いたままを書く)ので、文字を間違えるなど習得に問題がある。家族が、ばらばらに帰国した場合には、子どもに落ち着きがない、不安感がある、寂しがるなど精神的な問題も見られる。
学校への影響	校内でよく日本語を使うようになった。
教師としての意見	12 歳以上で帰国したような年齢の高い子どもは、帰国後苦労している。日本の学校に入れるならば、家庭内での母語保持が必要である。親の意識によって、ブラジルでの適応に影響が見られる。

私立 E 校(カソリック校)

創立年	1936 年
設置学年	未就学児から、高校・高等教育師範まで。
生徒数	800 人。日本から軒国政は 5~10 人。
教員数	70 人、日本語のできるシスター 1 人。
授業形態	2 部制
主な教科	

編入手続き	日本からの書類によるが、親の希望により1学年下のクラスに入ることが多い。
受け入れの対応	帰国生に対して偏見を持たないよう、教科学習の中で両国の違いを取り上げたり、日本の紹介をさせたりしている。 ポルトガル語に関しては、会話に支障がなくても読み書きに問題が見られるので、教師が説明を補ったり、学習が遅れている生徒には、補習をしたりしている。
帰国生のよい点	学習面はあまり問題なく、まじめによく学習する。日本の教育システムの影響か、すべきことはきちんとする。
帰国生の問題点	おとなしすぎて、友人が作れるか心配。知っていてもしゃべらず、聞かれたら言うが、自分からは発言しない。
学校への影響	特になし。
教師としての意見	子どもを日本に連れて行くことは、子どもが犠牲になることもあると思う。帰国して、子どもがブラジルに慣れないからと、また日本へ行く家族もあるが、在日、在伯どちらがいいか、子どもの幸せ第一で考えてほしい。

私立F校(経営母体：日系団体)

創立年	1993年。2003年高校新設。
設置学年	幼稚園から高校まで。
生徒数	360人
教員数	30人。日本語のわかる教師3人、日本語のわかる職員2人。
授業形態	全日制。高校：7時半～5時 小中学校：8時～5時 50分授業で8時間。
主な教科	ポルトガル語・英語・日本語・スペイン語・算数・理科・社会・体育・美術・音楽・コンピュータ
編入手続き	帰国直後は、特別クラスで様子を見てから決定。最初の2ヶ月は、テストをして流動的に学年を変えていく。
受け入れの対応	2002年から特別クラスを作り、ポルトガル語と教科学習の補習を行っている。
帰国生のよい点	特になし。
帰国生の問題点	ブラジルの文化・習慣・地理・歴史を教える必要がある。
学校への影響	在校生は、帰国生を温かく迎え入れており、学校で習った日本語で話しかけるなどしている。
教師としての意見	日本とブラジルを行ったり来たりを繰り返していると、日本語もポル

	トガル語も中途半端になってしまい、年齢の高い子どもだと、アイデンティティに迷いが出てきてしまうこともある。親が、日本にいる期間をはっきりさせ、2月の始業式には間に合うよう帰国するなど考えたほうがよい。ブラジルは生地主義なので、日本で生まれた子どもは外国人扱いとなってしまう、教科書が政府から配布されないなど、公的なサービスが受けられない場合もある。
--	--

パラナ州立 JACA モデル校 G 校(日本語・日本文化の講座を開講)

創立年	1989 年
設置学年	学年はなし。
生徒数	60 人。内子どもは 20 人。日本語を習っている子どもは 5,6 人。
教員数	日本語のわかる教師 7 人
授業形態	午前と午後、それぞれ 1 時間半ずつの授業。
主な講座	日本語・ポルトガル語・絵画・習字・折り紙・漫画・生け花・絵描き歌・墨絵
教師としての意見	子どもが、何度もカルチャーショックを受け、日本から帰国するのを嫌がったり、ブラジルの学校になじめなかったりする場合もある。日本ではブラジル人学校に行かせたくても、月謝が高く通えないのが問題である。
学校の特色	パラナ日伯文化連合会を母体に、JICA30%・地元からの資金 70%で運営。地区内の学校に協力すること、教師に役立つリソースセンターの役目をするを目指す。日本語や日本の文化を継承するという目的や、日本で覚えた日本語保持のために、親が通わせている子どももいる。

4. インタビューのまとめ

4-1 個人インタビュー

インフォーマントごとに条件が異なるため、それぞれ問題点は異なるが、いくつか、共通した問題点が見られた。まず、学校での拘束時間や行事、給食、清掃、課外活動、教師と児童生徒・保護者との関わり方、といった学校のシステムそのものが大きく違うので、日本へ行ったとき、あるいは帰国時にそれぞれの学校のシステムに慣れるまでに時間がかかり、場合によってはいつまでも慣れることができない。学習面においても日本で「日本語学習」が中心になっている事が多く、教科学習が十分ではないため帰国後学習についていくのが困難である。また C(インフォーマントの ID 番号。以下同)のように、九九や計算

方法など、基礎的なことを日本で習得した場合、大きくなっても計算は日本語という例も見られた。

学校での問題以外に、子ども自身への影響も大きい。例えば、ことばについては、帰国後数年にわたってポルトガル語がわからない、話せない、発音や聞き取りに誤りが見られるという問題が見られ(A-2, G-2, H, I, J)、CやKのように、帰国後10年近くたっても発音などに問題があるケースも見られた。いずれも小学校低学年時を日本で過ごした子どもで、上記以外にも小学校低学年時を日本で過ごしたB, D, M-1, M-2の場合は、帰ってきてから困ったこととしてはポルトガル語について言及していないが、D, M-1, M-2の場合は現在でも家庭内で日本語使用、あるいは日本語の方が話しやすいと答えており、Bについては、まだ幼少のため自分では意識していないが、母親は、ポルトガル語の発音に問題があるとコメントしている。Dの場合は、母親によると帰国時は聞けばポルトガル語も分かったが、自分からは全く話さなかったそうであり、帰国後すでに8年が経過しているが、未だに日本語の方が話しやすいと言う状況である。また帰国後、家庭内言語において日本語とポルトガル語が混在しているケースが見られたが(A-1, A-2, C, K, N-1, N-2)、それは内容によって「使いやすさ」から言語選択をしているのか、あるいは特定領域・語彙に関してポルトガル語が習得できていないのか、といった問題がある。さらにCのように日本語の習得が進んでいる場合、「思考は日本語」という回答もあり、これはアイデンティティへの影響も考えられる。それに加え、日本で生まれた子どもや、幼少時から長期間日本に滞在した子どもの場合、ブラジルへの帰国をいやがり、言語問題や生活習慣、文化、環境の違いなどから帰国後、戸惑いが見られる。C, D, Hは母親が、子供はブラジル式の挨拶を嫌がったので、子供と距離を感じた、とコメントしているし、幼少時(あるいは生まれたとき)から日本に長くいたC, M-1, M-2の場合、アイデンティティの面で揺れが見られ、「自分は何人だと思うか」という問いに対して「わからない」「半々」「日本人」と答えている。

また、A～Iについては親からのコメントを得られた。いずれも日本に行くに当たって、子供の教育やことばについて心配をしてはいたものの、特別な準備をしたり、情報を集めたりはしなかった。日本の学校については、特に教科外学習や課外活動に対する評価が非常に高かった。

4-2 学校インタビュー

学校の形態は日本とは大きく異なっている。2部制3部制をとっているところが多く、授業はポルトガル語・算数・理科・社会の他に、学校によって体育・美術・英語などを行っている。日本から帰国した場合には編入時に日本からの

書類をポルトガル語に翻訳したものが必要であり、編入学年は、書類による決定、あるいはテストをした上で判断される。親の希望で、1学年下に入ることもある。帰国した子どもたちには教科学習や言語面において問題はあがるが、学校全体としての特別な対応はあまり無く、学校や教師の裁量でポルトガル語の補習を、少し行うにとどまっていた。

いずれの学校でも聞かれたことは、日本から帰国した児童生徒の多くはまじめできちんとしており、教師の言うことを良く聞く反面、初めのうちは、おとなしく友達を作れない、自分から発言できない、ということである。またアイデンティティに揺れが見られる子どももおり、ブラジルの習慣になじめない、不安感や寂しさが見られるなど、精神面での問題がある子どももいる。

5. 考察

以上に述べてきたように、日本での一時的な滞在は、子どもたちに、学習、言語問題のみならず、アイデンティティにまで関わる深刻な影響を与えている。日本の義務教育課程では、「ポルトガル語保持」に関する教育は、システムの・予算的・人力的に限界があり、現段階では日本滞在のための日本語教育と教科学習が中心である。しかし、「ポルトガル語保持」も、帰国の直前、直後などの短期的ではなく、日本滞在中に長期的に行わないと、その後の言語生活に大きな影響を与え、場合によっては取り戻せないこともあり、さらにはアイデンティティにも関わってくる。だからこそ親自身が、仕事で忙しいとはいえ子どもの一生に関わる問題であることを重視し、ブラジル人としてのアイデンティティの確立と、母語の確立の重要性を強く認識する必要がある。また学習言語の習得は、帰国後の学習にも影響を与えるので、教育への展望を持つことも重要である。教育問題については親と学校とが連携を取り、日本滞在が子どもの将来にどのような影響を与えるかをよく周知した上で、子どもの教育をどう行なっていくか(滞在予定、どこでどこまでの教育を受けるか、日本での教育に何を望むのか、高等教育課程への進学など)を考えていく必要がある。また親へのインタビューを通じて、教科学習については知識の定着も必要だが、「考える力」「学習する力」そのものをつける必要があることも感じた。それができないと、大きくなって学習しようとしてもその前段階でくじけてしまう。「どうせブラジルへ帰るから」と、学習に臨む体制そのものを放棄してしまうことは問題であり、親の教育への展望はここにも影響してくるのである。

6. 今後の課題とまとめ

今回のインフォーマントは、日本での生活や学校に比較的適応できたケースであったので、学校や日本に対して肯定的な評価が多かった。しかし、日本での就学経験がある子ども達の中には、不適応や不登校をはじめ、いろいろな問題がある。その要因や、それが帰国後の生活にどのような影響を与えているかなどについても調査が必要である。今回の調査をパイロットサーベイと位置づけ、より綿密なインタビュー調査が必要である。また、家族を伴って日本へ行くケースは1990年以降増加したので、幼少期を日本で過ごした子どもは現段階ではまだ青年期である。従ってこれからの影響は未知数であるが、アイデンティティに迷いがある場合や、ポルトガル語の発音に影響が残っている場合、その彼らに子どもが生まれた時にどのような影響が現れるであろうか。10年後、20年後の追跡調査も必要である。しかし、治安面において不安が大きいブラジルでは、「出稼ぎ」から帰国したことを周囲に知られることで危険にさらされる可能性があるという理由から、インフォーマントの選定は困難であることも、今後の調査の上では考慮しなくてはならない。

ブラジル人児童生徒が日本で就学する際に起こる問題と同じ事が、ブラジルへの帰国時にも起こっている。子ども達は必ずしも自分たちの意志で移動している訳ではなく、また幼少期であるだけに、親や周囲の環境に大きく影響を受け、それは時として彼らの一生を左右すると思われる。まずは親をはじめ周囲の大人たちが、「子ども一人一人の人生」という長期的な問題として考える必要がある。また日本語教育の更なる充実とともに母語でも教育を受けられる支援体制も望まれる。今回のインタビューから得た回答に見られた問題点が、教育現場や日本に滞在するブラジル人保護者へとフィードバックされ、多くの子ども達が将来的の展望を持って過ごせることを願ってやまない。

参考文献(主要なもののみ)

- 天野弥生 2004 「外国籍年少者の教育をいかに保障していくか」 『ことばと文化』長野・言語文化研究会創刊号
- 熊崎さとみ 2003 「外国人の義務教育就学をめぐる諸問題ーブラジル人児童・生徒の場合ー」 『信州大学留学生センター紀要』第4号
- 熊崎さとみ・天野弥生 2006 「長野県在住ブラジル人児童生徒の教育問題」 『信州大学留学生センター紀要』第7号
- 関口知子 2003 『在日日系ブラジル人の子どもたち』 明石書店
- 福永文子 2003 「日本から帰国した子どもたちの様子」 『平成14年度国際シンポジウム「在日ブラジル人年少者の言語問題を考えるー日本語教育と母語(ポルトガル語)教育の現状と課題ー」報告書』 長野・言語文化研究会編

付 記

本稿執筆にあたり、1, 2, 3-1, 4-1, 5, 6 章は熊崎が、3-2, 4-2 章は天野が主に担当した。

本調査のコーディネートをしてくださった藤井エステーラ氏、五十嵐俊夫氏、橋本リカ氏はじめ、私共のブラジル滞在を支えてくださった方々、インタビューに協力してくださった皆さん、ここに記して厚く感謝申し上げます。

(信州大学 国際交流センター 非常勤講師)

(SAY 日本語学校 講師)

2007年3月1日 採録決定